

# 口承文芸の電子テキスト化について —『遠野物語』を事例として—

## 多比羅 拓

### 一、はじめに 研究方法そのものを対象とすること

現在、さまざまな分野で電子テキスト化による資料の保存と活用が進められている。口承文芸においても、昔話やアイヌ語の資料がWEB（ウェブ）上で公開されている（注1）。口承文芸が電子テキスト化にどのように対応し、活用してゆくかということは、現在の大きな課題になりつつある。

昔話研究の重要な成果として、これまで作成された関敬吾氏による話型のタイプインデックス、小澤俊夫氏を中心に進められている昔話記述言語（FDL）による検索は、昔話本文、語りの表現そのものを直接検索するものでない。したがって、編者との作成した「話型」「要素」という既成の枠組みがそこにはあり、この分類を共有することが、研究の前提として存在する。

その際、「昔話は、小説や詩などとは異なり、感情的表現や抽象的表現が極めて少なく、ほとんどが客観的事実を記号的に

羅列することによって語られている」（注2）という佐藤皇太郎氏の認識は、昔話を「話型」「要素」の面から構造的に分析する場合には有効となる。

しかし、これが昔話研究における唯一の方法ではないだろう。昔話を「一回性の文芸」とするのであれば、そこには豊かな言語表現の世界が広がっているはずである。今回取り上げる『遠野物語』は、文字化されたテキストとしては早い時期のものである。したがって、後代の昔話採集とは大きく異なるかたちで作られている。しかし、口承文芸を考える上で資料としての意義は大きい。

平成二二年度から東京学芸大学大学院では、『遠野物語辞典』制作を行ってきた（注3）。その過程において、柳田国男『遠野物語』の電子テキスト化を試みた。今回は、この『遠野物語』電子テキストを用いて、従来の話型・要素とは次元の異なる言語表現レベルでの分析を行ってみたい。『遠野物語』の各話に

用いられている任意の語が、「遠野物語」というひとつのテクストのなかでどのように用いられ、どのように位置づけられるかを明らかにすることを主眼とする。最終的な結論を「話型」や「要素」に求めない時点で、新しい方法を用いる必要がある。本論は書物の「題目」「索引」にたよる段階では十分にできなかつた分析であり、そこには『遠野物語』の電子テキスト化とコンピュータの使用が大きく寄与している。

本論は、研究方法そのものを対象とすることになる。ここで、

今回提示する研究方法について整理しておく。現在行われている研究方法については、大きく九つに分類できるとされる。

（a）地域に関わる□承文芸（昔話）の研究

#### ①昔話の蒐集

②昔話が伝承されてきた事情や伝承者にまつわる研究

（民俗学的方法）

③日本文学との関わりを明らかにする日本文学的方法

④文化人類学的視点

⑤深層心理学的分析

（b）□承文芸（昔話）の話型・構造に関わる研究

⑥昔話の話型的研究

⑦構造の研究

⑧語りの様式の研究

⑨各要素が昔話内部でいかなる機能を果たしているかという

イメージの研究（注4）

今回新たに考えてみたいのは、次のよつな研究方法である。  
（c）□承文芸（昔話）の表現・語彙に関わる研究

従来の（b）との相違は、話型や構造にとらわれず、テクストそのものに即した語彙や表現そのものへの分析にある。

## 二、従来の『遠野物語』研究の方向性と電子テキストを用いる意義

『遠野物語』初版本（明治四三年発行）には、「題目」が用意されていた。また『遠野物語』増補版（昭和一〇年発行）から、新たに「索引」が整備された。『遠野物語』では、この「題目」「索引」が整備されたことにより、ただ前から読んでゆくだけではなく、「題目」「索引」に分類された複数の話を横断して読むという、もう一つの読み方が可能になった。この工夫がもたらした恩恵は、「研究」において非常に大きな役割を果たしてきたはずである。しかし、この『遠野物語』における「題目」「索引」は、筆者（柳田国男）や索引作成者（鈴木栄三）によって作られたものであることを、改めて考えておきたい。特に「索引」は、『遠野物語』以後に成立した日本民俗学の関心に影響された立項となつていて。

今回作成した『遠野物語』テキストデータは、『遠野物語』全文をテキストファイル形式で入力したものである。以下に挙げるのが『遠野物語』テキストデータの内容である（括弧内は

底本を表す)。物語本文のみではなく、「題目」や「索引」、図版中の地名を含めた文字データ全体を扱っている点が特徴である。

- ・「遠野物語」  
　　(『柳田国男全集2』(注5))
- ・「遠野物語拾遺」  
　　(『柳田国男全集2』)
- ・「後記」(折口信夫)  
　　(『柳田国男全集2』)
- ・「索引」  
　　(『遠野物語 増補版』(注6))
- ・「遠野郷関係略図」より地名等の文字データ

(『遠野物語 増補版』)

このテキストデータ作成の目的は、コンピュータの検索機能を使うことで、全文検索(語彙検索)を容易にすることにある。従来の書物から、既成の「題目」「索引」で用意された分類や整理の枠組みを超えることは難しかった。一方、テキストデータでは、文字レベルでの語彙検索が容易になり、その検索結果から任意の語彙が『遠野物語』のなかでどのように用いられたかを検討できるようになる。『遠野物語総索引』にあたる書物が整備されていないため、「題目」や「索引」にない語彙を検索する場合に有効であろう。分析者の関心に基づく任意の語を、そしてどのような用例があるかを自由に、短時間で網羅できる。書物にあつた「題目」「索引」の持つ限界を乗り越え、より精密な語彙の用例を拾うことが、テキストデータを用いた研究の第一の利点である。そしてこれによって初めて、語りのなかの語彙を、細部にわたる表現レベルで分析することが可能

になる。

こうした表現レベルの問題は、話型の研究においては、どうしても切り捨てられてしまうもので、やはりコンピュータを用いた検索システムであるFDLにおいても同様であろう。しかし、話型という概念を支えるのも語りを形成する言葉であることを、改めて考えておきたい。そして、同じ話であっても語り手によって異なるものとなるという認識についても視野に入れておきたい。『遠野物語』テキストデータに即して言えば、これらは『遠野物語』原文そのものをデータ化したものである。ここに収められている話は、数多く存在するオシラサマや河童の話との差異を含みながら、『遠野物語』として独立したものである。したがつて『遠野物語』全文を検索することは、独立した一つのテキストの性質を明らかにする方向へと向かうことになる。この多様性を前提とした語りの表現に目を向ける姿勢は、□承文芸の構造という巨視的な研究視点とは異なる視点ではあるが、無視することはできないだろう。

### 三、テキストデータ作成と検索における問題点

このコンピュータによる全文検索は、語彙検索というよりも、文字検索という方が正確である。指定した語の位相を考慮せず、文字単位で設定した検索条件に一致するものをテキストデータから抽出し、その結果を表示するものである。この文字検索は、

指定した文字しか検索結果に表れないため、旧字や異体字といった表記の揺れの処理や方言の問題などは、データ作成やその利用の際に注意を払わねばならない。

『遠野物語』のような出版が先立つテキストを底本とする場合、改行や行に対応した頭註・見出しの配置など、レイアウトについては、ある程度断念せざるを得ない点も生じてくる。ここで、一例として拾遺一〇九話を見てみたい。『全集』の底本である『遠野物語 増補版』、底本とした全集版『遠野物語』、今回作成したテキストデータの三者である。

テキストデータにする際、底本どおりにできない部分もいくつかある。ひとつは「狐媚」のように上部に付されたものの処理で、これに該当するのは「遠野物語」の頭註や「遠野物語拾遺」の見出し語である。今回、頭註と見出し語は、一括して話の末尾に移動した。見出し語の位置は、本来本文では該当する語彙の上部に付けられている。したがってこの見出し語は本文と対応しており、「読み」の次元では重要な情報を含んでいる。しかし今回は、一段組みにできないファイル形式のため、このレイアウトについては断念した。ただしテキストデータは、「読むためのテキスト」ではなく、「検索のためのテキスト」である。ある語彙がコンピュータによる全文検索で拾い上げることが可能か、ということを最優先に考えているため、この処理がテキストデータの価値を下げるものではないと考えている。他の電子テキストと同様、『遠野物語』研究を行うときに、こ

のテキストデータすべての代用となるとは考えておらず、そのままの表記方法があるものについては、敢えて統一を図らず、そのまま残している。こうしたデータ作成での処理のうち、表記は検索の方法に直結するだけに、作成の段階で十分に自覚的である必要がある。これは作成者のみの問題ではなく、正確な検索結果を得るために、検索する側も把握しておくことが求められる。書物の総索引の類と異なり、一度の検索で、ある語彙の用例についての正確な検索結果が得られるとは限らないためである。たとえば『遠野物語』の場合、「ハヤチネ」という地名に「早池峰」「早地峰」二通りの表記があるなど、一語に複数の字を宛てるものある。そのため「早池峰」の全用例を拾うには、「池」「地」それぞれの用例を検索する必要があり、場合によつては二通り以上の条件で検索することになる。「早池峰」をひらがなで表記する用例はないが、ひとつの語彙が漢字とひらがなで併用されている場合もあるだろう。

データ作成の時点で、表記の忠実さを無視し、語彙の有無を調べるという目的に絞れば、全文ひらがなで入力するという方法も考えられる。しかし仮に全文ひらがなにしても、活用語の検索についての不便さは解消されない。したがって「言う」という語彙を調べたいときには、語幹のみの検索や、ひらがな表

孤姫

一九九 是はつゞ一兩年前の話。土淵村の長左衛門といふ者が、琴畠川に釣りに行つて居ると、川ばたの路を見知越しの女が一人通る。それは琴畠から下村の方に嫁に行つて居る女であつた。言葉をかけると笑ふからい好い氣になつて女のものとに手を出しがたが、女はえせほゝと笑つてはちよいと避け、えせほゝと笑つてはちよいと退いた。さうして山の中を三日三夜、其女の跡を追うてあるいたといふ村でも、高山のサツミ山といふ處の頂上に出で、眼の下に村屋を眺めた時に始めて氣が附いた。すると其女も段々と狐になつて、向うの芦山の方へ走つて行つた。それからぐだに疲れきつて、家に帰つて暫らく病んだと本人は言つて居る。

## ■『遠野物語』(『柳田国男の全集2』)

孤姫

一九九 是はつゞ一兩年前の話。土淵村の長左衛門といふ者が、琴畠川に釣りに行つて居ると、川ばたの路を見知越したの路を見知越しの女が一人通る。それは琴畠から下村の方に嫁に行つて居る女であつた。言葉をかけると笑ふからい好い氣になつて女のものとに手を出しがたが、女はえせほゝと笑つてはちよいと避け、えせほゝと笑つてはちよいと退いた。さうして山の中を三日三夜、其女の跡を追うてあるいたといふ村でも、高山のサツミ山といふ處の頂上に出で、眼の下に村屋を眺めた時に始めて氣が附いた。すると其女も段々と狐になつて、向うの芦山の方へ走つて行つた。それからぐだに疲れきつて、家に帰つて暫らく病んだと本人は言つて居る。

## ■『遠野物語』テキストデータ

一九九 是はつゞ一兩年前の話。土淵村の長左衛門といふ者が、琴畠川に釣りに行つて居ると、川ばたの路を見知越しの女が一人通る。それは琴畠から下村の方に嫁に行つて居る女であつた。言葉をかけると笑ふからい好い氣になつて女のものとに手を出しがたが、女はえせほゝと笑つてはちよいと避け、えせほゝと笑つてはちよいと退いた。さうして山の中を三日三夜、其女の跡を追うてあるいたといふ村でも、高山のサツミ山といふ處の頂上に出で、眼の下に村屋を眺めた時に始めて氣が附いた。すると其女も段々と狐になつて、向うの芦山の方へ走つて行つた。それからぐだに疲れきつて、家に帰つて暫らく病んだと本人は言つて居る。

孤姫

記の可能性も考慮に入れた複数の検索が不可欠である。

また、検索結果には余分なデータをも含めた結果があらわれる。たとえば「池」を検索すると、「早池峰」のように水の池とは関係のない語彙も用例として拾われる。検索結果がそのまま全用例一覧とならないのである。(このように、従来の「索引」を大きく越え、より正確に用例を拾うことができるコンピュータの全文検索であるが、データ作成と検索に工夫が必要なもの確かである。

データ作成や検索の問題とは異なる次元の問題であるが、『遠野物語』については、著作権が切れていないため、作成されたデータの扱いには慎重にならざるを得ない。

#### 四、『遠野物語』テキストデータによる分析

テキストデータから文字検索をかけると、その文字が使われている箇所を網羅的に拾う。そのため、余分なデータが拾われてくることもある。それは予期しない、あるいは目的や結論から考えれば必要としない用例ではある。けれどもそれらを含めたデータを見ていると、そこから複数の位相にまたがったイメージを我々に気づかせることもある。

『遠野物語』の場合は、「題目」「索引」に入らない語彙であるが用例数は比較的多い、という語彙についても、その全体像をつかむことが容易である。そのような例をいくつか紹介して

みたい。検索には、Global Computer Project作成のフリーソフト「GrepHディタ Ver1.0.0.1」を用いた。

##### 《用例 I 「狐」》

「狐」は『遠野物語』で二八の話に出でくる」とが検索によってわかる。次頁の別表は、文字検索の結果をExcelで表示したものである。表は、上から「遠野物語」の「題目」「本文」、「遠野物語拾遺」の「題目」「本文」、「索引」という順で並んでいる(注7)。「狐媚」で一行取っているのは、先に述べた「遠野物語拾遺」の見出し語である。本文については、表では一行分しか表示されないが、ここに表示された部分しか入力されていないと言うことではなく、上の欄から本文全体を見ることが可能で、(二)ではその五行目に「狐」という語彙があり、検索ではこの文字を拾つたことになる。

この「狐」という語の検索結果のうち、「遠野物語」「遠野物語拾遺」の各「題目」で指摘されているのは二四の話で、そのうち「遠野物語」二一話、一〇〇話、「遠野物語拾遺」一一五話、一七四話、二五一話、二七九話が「題目」にない話である(注8)。逆に「題目」で指摘されているが、この検索で拾えなかつた話が、拾遺一八八話、拾遺一八九話である。これらはいずれも「稻荷」の話である。このように同じ「狐」に分類されるものでも、語彙が異なると検索結果に表れない例もある。

この結果からは実際の用例と「題目」との相違の他に、「遠野物語拾遺」の見出し語の語彙と「索引」の語彙とのずれや、

[別表]

Microsoft Excel - 道野物語[1]	
[ツール] [検索] [表示] [挿入] [書式] [ツール] [データ] [セル] [ヘルプ] [四角を入力してください]	
O27	一九九 是はつい一两年前の話。土淵村の長左衛門といふ者が、琴畠川に釣りに行って居ると、川はたの路を見知越しの女が一人通る。それは琴畠から下つの方に、娘に行つて居る女であつた。言葉をかけると笑ふから、つい好い気になつて女の手もとに手を出したが、女はえせほゝと笑つてはちよいと遊び、えせほゝと笑つてはちよいと戯した。さうして山の中を三日三夜、其女の跡を追うてあもいといふ、村じこ高山のサツミ山といふ處の頂上に出て、眼下に村屋を眺めた時に始めて気が附いた。すると其女も段々と頬につけて、向うの童山の方へ走つて行つた。それからくたくたに疲れきって、家に帰つて晩く病んだと本人は言つて居る。
Data	〔道野物語番直・一木節全文(画面切り引)
狐	六〇、九四、一〇一
二二	右の孫左衛門は村には珍しま学者にて、常に京都より和服の事を身着せて読み駄(フケ)たり。少し要人と云ふ方なり。獺と親
並野物語本文	六〇 和野村の異兵衛頭(ダイ)、雑子小屋(エジヤコ)に入りて雑子を待ちしに、獺(キツネ)罠(シバシバ)出でゝ雑子を追ふ。あまり重
道野物語稿文	九四 この前感、伯爵なる婦の家に用あひて行き、振舞はれたる残りの物を畠に入れて、鬼屋山の藤の林を過ぎしに、鬼押(カツヅリ)の森
題目	一〇一 船越の漁夫何事、あら日仲間の者と共に吉里音里(ギリギリ)止の船にて、夜遅く四十八坂のあたりを通りに、小川のある所にて
道野物語稿文本文	一一一 旅人賃宿(ヨコマネ)村を過ぎ、夜更け疲れたれば、知音の者の家に灯火の見ゆるを幸に、入りて休息せんとせしに、よき時に
狐	獺一八八二〇八
一三	一五一 金沢村の委任人が自見山に狩りに行って山中で夜になつた。家に帰らうとして沢を来たると、突然前に薪焼が三本、ほとぼり
狐の仕わざ	一四 狐狸の仕わざ
一五	一七四 遠野の家中的是川右平といふ人の家で、春の或晩に主人は子供を連れて侍下の芝居を見に行き、夫人はたゞ一人何ん傍で狂物
一六	一七〇 菅原田淵村の厚達(あつだ)といふ家で、主人が死んで後毎晩のやうに、女房の寝室の窓の外に死んだ夫が来て、お前を残
一七	一七一 附馬牛山学張山(はるやま)の某といふ家では、娘が死んでから毎夜廻數に来てならなかつた。初めは影の様なものが障子に映
狐と幽霊	一八 獺と幽霊
一九	一九二、遠野六日の卯治松木三右衛門といふ人の家に夜になると何処からとも無くがらがらと石が降って来る。それが評判になつて
二〇	一九三 遠野の城山の下の多賀神社の獺が、市口などには魚を貰つて帰る人を捕縄で、持つて居る虫をよく咬つた。いつも騎織る縄獺
二一	一九四 遠野の六日町の外川某の祖父は、号を仕房(せふう)とて画を賣つて歩く者であつた。每朝起步をするのが好きであつたが、或日早く
二二	一九五 遠野の六日町に宇摩河童(うまかわどら)といふ男がある。川仕事を人並はづれて選進な所から、河童といふ名前で附けられたので
二三	一九六 遠野の大般寺の隣の下には獺が巣をつくつた。大般寺の敷石門といふ人が、或時酒肴を台の上に載せでそこを通つたところの娘取り
二四	一九七 佐々木君の友人の一人が遠野の中学校の生徒の時、春の日の午後に町へ出て牛肉を買ひ、竹の皮包みを下げて鍋倉山の麓、
二五	一九八 小村君に頼といふ鉢名の人があつた。駄賀附けが瀧世であつて居たが、元同村団子の兼裕といふ処まで来ると、向うから
二六	一九九 是はつい一两年前の話。土淵村の長左衛門といふ者が、琴畠川に釣りに行って居ると、川はたの路を見知越しの女が一人通
27	28 獺
29	29つた。朋龍がそれに気が附いて色々尋ねるので、実は乞食の娘にねんごになつたことを話すと、そんならどんな女だから見届けた上で、
30	30二 小村村魅良の某といふ者、或日遠野の町へ出る途中で、見知らぬ旅人と道連れになつた。其旅人はそちの家の名を指さして、
31	31二〇この鏡鏡便ひはどうでも近年になつて來つて来たる者の様に謂つて居る。土淵村の某といふ者があつたが、やはり旅人から飯鏡の種獺
32	32二三 遠野の元町の和田といふ家に、勇吉といふ下男が上御村から来て居た。或日生糞に遭つたとして、町はづれの駕籠にさしかゝる
33	33二四 是が正大年十一月十三日の岩手毎日新聞に出て居た話である。小国の中の和井内(わかない)といふ郡瀬の奥に、筑紫の
34	34二五 遠野町上通しの荷舟(はこぶね)といふ大工が土淵村の仰田目(むにたがめ)へ土蔵を建てて来て居て、梯上げの梯の日町へ帰つて、
35	35手出しさをしたから化され取つて見ろと言ひ棄てて通り過わた。其折同行して居た吉首館などは、そんな事をいふものや無いと制し
36	36二〇六 この政告が小村村に居た苦い時の事である。或年の正月三日、小友の柴船といふ家から、山室の自分の居た町まで、帰つて、
37	37湯治に火災が移るなど、そこで希へてそつと友ちゃんの一人を呼んで、其鉄瓶を持たせてそこへ居て居て居てもらう。自分は今一挺
38	38二〇七 楠野村の某といふ者、二人づれで初神(はじかみ)の山へ入つて、虎狩をして居たことがある。其一人は村に女を持つて居て、
39	39下つて先づ風呂歌の拂主(はらぢぬし)と見ゆると、昨晩悪といふ氣に婚礼があつて、土地の習にして豆腐を持って行つてあつたが、或人の持
40	40二〇八 つい近年の事である。小国村で三十二になる男ヒ十八歳の若者と、二人づれで普豈(ひはな)を歸りに山に入った。その川の河
41	41結んで小屋の口に釣るして置いて退散した。翌朝も起きて其猫を見て冗談などを言つて居たのだが、其中に外から監視の男が入つて来て、
42	42獺と猫
43	43二五一 線名の類も亦甚だ多い。法螺を宣ふから来る法螺體。片であるから英々メツコ、頭から英々ビツコ、テンボであるから英々タテン
44	44二七九 小正月は女の年取りである。此日は家の中の諸道昌も年老取る日であるから余廻に貸してあつた物等も皆持つて来ておひやうに
45	45獺
46	46二二一、六〇、九四、一〇〇、一〇一、拾遺一七四、拾遺一八九、拾遺一九〇、拾遺一九一、拾遺一九一、拾遺一九一、拾
47	47獺と死人
48	48獺の餅
49	49獺の嫁取り
50	50獺のいわぎ
51	
52	
53	

「索引」での立項の有無も読みとることができる。拾遺一九九話「狐媚」、拾遺二〇八話「狐と猫」などは「索引」で指摘されていない。そしてここで挙げられた用例は、動物の狐でないものも含まれる。拾遺二五一話の綽名としての用例、拾遺二七九話の「狐の餅」というような行事としての用例についても、拾うことができる。動物の狐に限定して調べたいという場合には余分なデータになるが、「遠野物語」の「狐」という語が担う世界のひとつとして、決して無視することはできないものである。

さて、これらの話を見渡すことから見えてくる事柄をいくつか整理したい。真鍋知代氏は「狐の話」について、遠野で稻荷信仰が薄らいでいること、人と狐の駆け引きがテーマとなつていることを指摘する（注9）。「稻荷」と「狐」については、先に述べたとおり、「狐」の語彙からは、「稻荷」の話である拾遺一八八話、拾遺一八九話は拾つことができなかつた。「遠野物語」において、「稻荷」と「狐」が併用される用例は、二一話のみである。この話では孫左衛門が、狐と仲良くなることで家を富ませようと思いつき、稻荷の祠を建てたり、一日一枚の油揚げを供えて狐をなつかせたりしている。信心深いことは確かであるが、この孫左衛門は「変人」とも言われており、薬師堂の守からは、仏様には何も供えないが孫左衛門の神様より御利益がある、と笑いごとにされている。ただし、すべての狐が稻荷の使者と考えられたり、あるいはあらゆる稻荷への信心が

笑いごとにされたとは考えがたい。「稻荷」の用例はほかに拾遺二四八話で稻荷坊から取子名をもらうこと、同じく拾遺二七五話の稻荷様の年取りの日が定められていることがある。

狐と人の駆け引きにおいて、人が受けた被害は、魚や餅を取られる（九四話、拾遺一九五話、拾遺一九六話、拾遺一九八話、拾遺二〇五話、拾遺二〇六話）、予想外の所へ連れて行かれて病を得たり半死半生となる（拾遺一九九話、拾遺二〇三話、拾遺二〇五話）、道具を使えなくされる（六〇話、拾遺一〇六話）など、人命に関わることは少ない。一方の狐は、だましているのが人に気づかれると、実害を与えていたくとも殺されることが多い（一〇〇話、一〇一話、拾遺一九〇話、拾遺一九一話、拾遺一九二話、拾遺二〇六話、拾遺二〇七話、拾遺二〇八話）。この狐が化けるときは、女に化けていることが多い。近藤正尚氏は「特に美しい女性に身を変え、相手をだますことが多い」（注10）とする。狐が女に化ける話は一〇〇話、一〇一話、拾遺一九一話、拾遺一九三話、拾遺一九五話、拾遺一九九話、拾遺二〇〇話、拾遺二〇六話、拾遺二〇七話の九つの話である。確かに狐が特に女に化ける話は多いが、女に化けるのが得意であるということではない。これはだます対象に起因するものであり、きわめて合理的な化け方をしている。ここで女を見るのは、すべて男なのである。女房をだまそうとするときには、狐は夫になつて出る。一方、六〇話の藤七、拾遺一九八話の「侍」、拾遺二〇四話の「大の男」のように、男に化けて男をだまそう

とする話もある。菊藏から餅を奪うときには藤七となって相撲を取り、また相手を威力によつて脅かそうとするときには「侍」という身分差や、「大の男」という体格差を利用しようとしたのである。女に化けて女をだますという話は、「遠野物語」のなかにはない。そして、「蠟燭」（拾遺一五話）や魚ではなく牛肉をねらう「兔」（拾遺九七話）のように、化ける対象への必然性がつかみにくい話については、「多分狐狸の仕わざだらう」（拾遺一五話）、「是も狐であつたらう」（拾遺一九七話）という曖昧な叙述をしている。この両話については、青木俊明氏も「実際に狐の仕業かわからないものまで狐の仕業としてとらえられている」（注11）と指摘している。

#### 《用例II「蛇」》

『遠野物語』での「蛇」の用例は、「遠野物語」で三つの話、「遠野物語拾遺」で二〇の話に見つけることができる。「遠野物語」と「遠野物語拾遺」との間に大きく数の隔たりがあることに、まず気づく。「蛇」は「遠野物語」では「題目」に立てられないが、「遠野物語拾遺」では「題目」に立てられている。「蛇」は、本文だけではなく、「題目」や「索引」を含めて分析の対象とし、数量の差を見くらべると「遠野物語」と「遠野物語拾遺」での扱いの相違が明らかになる例と言える。

「遠野物語」では「題目」に「蛇」がないと述べたが、「遠野物語拾遺」の「題目」でも「蛇」の用例が網羅できるわけではない。二〇の話のうち、「題目」で指摘されるのは七つの話

（三〇話、三一話、三三話、三四話、一七九話、一八〇話、一八一話）と、本文に「蛇」ではなく「山かがし」とある拾遺一八〇話の計八話に限られる。

「索引」では、「蛇」の項目で挙げられるのは七つの話（二〇話、拾遺一〇五話、拾遺一二四話、拾遺一七九話、拾遺一八〇話、拾遺一八一話、拾遺二五五話）（注12）であり、「刀と蛇」「大蛇」など、より細かな項目分けがなされたものを含めても一七にしかならない。この「蛇」を含む「索引」項目は、先に挙げた三つの他に「黒蛇大明神」「黒蛇の靈験」「小蛇」「蛇洞」「蛇の鱗」「蛇塚」の九項目に渡る。この「索引」は、底本ではイロハ順（注13）になつてゐるため「蛇」の項目を一覧できな。また「蛇の鱗」は「じやのうろこ」と読み、「蛇」にも読み方も「へび」「じや」と複数あるため調べやすいとは言い難い。拾遺一四四話見出し語の「蛇と剣」は、「索引」では「刀と蛇」となつており、本文と「索引」の項目に聞きがあるなど、「索引」の問題点も指摘できそうである。今回のテキストデータによる文字検索では、この種の不便さは解消されることになる。

『遠野物語』の蛇の話の内容について、花部英雄氏は「（1）蛇を殺して崇られた話、大蛇退治譚、（2）蛇に見染められた話や、入水したりする蛇ヶ淵系の話、（3）名刀が赤い蛇に化したという蛇太刀の話、（4）蛇で吉凶を占う話、蛇飼いの話」と四つに分類する（注14）。これらはいずれも人間を主体にし

た蛇との関係を分類している。そこで、ここでは蛇に焦点を当てて検討してみると、次のようになる。殺されて祟る蛇（二〇話、拾遺一八二話、拾遺一八二話、拾遺三二八話）と殺すことを禁じられる蛇（拾遺一二四話、拾遺一八一話）、殺されて祀られる蛇（拾遺三三二話、拾遺一八二話）と祟らない蛇（拾遺一八〇話）、家や持ち主を守る蛇（拾遺一四二話、拾遺一四三話、拾遺一四四話、拾遺一八一話）、人が蛇になつた蛇（拾遺三〇話、拾遺三一話）、神としての蛇（拾遺三四話、拾遺三四四話、拾遺四六話）、見ただけで怖がられる蛇（拾遺一〇五話、拾遺一二五話、拾遺一七九話、拾遺二九七話）、などである。

『遠野物語』では、「蛇殺しは先祖殺しに相当する」（拾遺一八一話）と言われたり、蛇を祀る言い伝えを破つたものが祟られて死んだり（拾遺一八二話）、非常に畏れられているにも関わらず、蛇が殺される話が多いと言える。また何もしていない蛇を見ただけで逃げ帰つてしまふ話がある（拾遺一七九話）一方で、蛇に逢うこと自体を吉兆とする話（拾遺二五五話）もある。蛇への姿勢は、忌避ではなくむしろ畏敬と言えるのではなか（注15）。

二三の話のうち、「索引」でたどれるのは一八の話である。ここで漏れた五つの話は、六九話の「佐々木氏の祖母の姉」がまじないで蛇を殺すこと、一一二話の頭註「ホウリヤウ権現は遠野を始め奥羽一円に祀らる、神なり蛇の神なりと云ふ名義を知らず」、拾遺二五一話の綽名の例、拾遺二九〇話のヨガカユ

ブシの歌謡の歌詞「蛇百足に負けな」、拾遺二九七話の「蛇の如く」という比喩の例である。いずれも実際に蛇が出てくる話ではない。しかし、いずれも「蛇」をどのように見ていたかを知るうえで興味深い例である。六九話では魔法に長じた「佐々木氏の祖母の姉」に対し、恐ろしい蛇を殺すという行為を「まじなひ」で行い、さらに崇りを受けないということを特筆するものであろう。拾遺二五一話、拾遺二九〇話からは、綽名になつたり歌謡になつたりするほど身近な生き物であつたこと、拾遺二九七話からは、蛇の生態のうちで脱皮するということに着目していくことがわかるのである。

### 《用例III「馬」》

「馬」で問題となるのは、これが「遠野物語」「遠野物語拾遺」いずれの「題目」にもない語彙であるということ、そうでありながら用例数が非常に多いことである。この点については石井正己氏が指摘している（注16）。『遠野物語』のなかにでてくる動物のなかで特に用例が多く、地名や「馬鹿にする」などの用例を除くと、六二の話に馬、馬具などの馬に関係することがらや歌謡を見いだすことができる。この文字検索では「厩」は拾えないため、馬に関係する事柄についてはもう少し用例が増えることになる。ここに「附馬牛」などの地名などを含めると一一五例見られる。直接馬に関係するものではないが、「熊」において動物の「熊」と人間の「熊」の格闘の話を紹介する四三話のように、「馬」という言葉とその周辺を取り巻く環境、

普通名詞と固有名詞、地名や人名での表記などの関係は、その数も多いだけに、無視してはならないものであろう。

『遠野物語』の馬は、オシラサマの由来や御蒼前様、駒形神社、馬頭観音の話からも神仏と深く関わり、年中行事、出産や死と葬送などとも関わっていたことは早くから注目されている。話のなかでの具体的な活躍としては、駄賃付けの馬であつ

たり、刈草を担つたり、農耕よりも荷の運搬のために使われた話に多く登場する。これは話の舞台が畠よりも道や山中での出来事を多く扱つているせいかもしれない。石井氏は「馬や牛はその家の富の象徴であった」（注17）とし、マヨイガ（六三話、六四話）とヤロクロの歌（拾遺二八一話）を挙げる。馬は「富の象徴」と同時に、飼っていた多くの馬が急にいなくなることは、家の没落を暗示する象徴的な出来事でもあった。そういう話には、狼が「馬の七頭ありしを悉く食ひ殺し」、そのころから家が傾き始めたという小友村の旧家の話（三八話）、「一晩の大水の為に有る限りの馬が、一頭残さず流されて」いて、それが仁右衛門長者の滅亡であったという話（拾遺一三三話）、犬を殺して捨てて以来、「續けざまに馬が七頭も死んだり、大水が出て流されたりして、家が衰へて終に滅びてしまつた」という土淵村大橋の林吉という金持ちの話（拾遺一三四話）がある。

また、馬に関わる音を扱つた話もいくつか見られる。馬の鈴の音を頼りに家に帰る父の話（拾遺一四五話）、出棺の時に馬の音を頼りに家に帰る父の話（拾遺二六四話）、男性の死の前兆として試みたことは、従来の関心にとらわれず、動植物、神仏、生活に関する語彙を本文から直接拾い上げ、個々の語彙が『遠野

が嘶くのを厭う風習（拾遺二六四話）、男性の死の前兆としてデンデラ野を通る馬の鳴輪の音（拾遺二六五話）、真夜中に軍馬や人の叫び声が聞こえる戦争場（拾遺二六七話）がある。春馬は、実際に馬を用いるわけではないが、鈴を鳴らしながら家を周り、馬の絵を餅と交換する行事であるという（拾遺二八六話）。

## 五、電子テキストを用いた研究の可能性

今回作成した『遠野物語』テキストデータという電子テキストは、手作業に頼る語彙検索を、より自由に、より短時間で正確に行いたいという動機から取りかかった。データの入力は、個人の力で完成させることは困難で、一二名の大学院生で取り組んではじめて完成したものである。こうした共同作業の必要性は、『遠野物語』の場合に限らず、今後進むであろう多くの昔話の電子テキスト化の作業やFDLの入力作業にも共通する問題でありながら、解決の難しい問題もある。しかしこれらの共同作業の成果が、『承文芸・昔話』の研究に大きく寄与することは明らかで、この『遠野物語』での試みが今後の動きのひとつとなることを強く期待したい。

テキストデータを用いた分析のひとつとして『遠野物語辞典』で試みたことは、従来の関心にとらわれず、動植物、神仏、生活に関する語彙を本文から直接拾い上げ、個々の語彙が『遠野

物語」の世界をどのように作り上げているかを丹念に調べ上げることにある。たとえば「動植物編」であつかった項目のうち、植物のほとんどは、『遠野物語』で「題目」となつていもないものであった。動物についても、「題目」「索引」で網羅されていわけではないことについては、先に述べたとおりである。

また「動植物編」「神仏編」「怪異編」での試みは、『遠野物語』を構成する名称の世界を対象としたものとも言える。「遠野物語辞典 生活編」では、身体や動作に関わる表現についても視野に入れることを試みた。身体については身体部位にとどまらず、「聴く」「見る」などの動作にまで視野を広げ、「直話」「叫ぶ」などについては、別に言語行為に関する問題として考察した。動作については用例数も非常に多く、これらの分析にはテキストデータが不可欠になるだろう。

テキストデータを用いることの最大の利点は、ある特定の語彙について、本文そのものに基づき、数量的な裏付けを持つ実証的な分析ができるという点にある。これによつて、同じ話型においても表現の細部は大きく異なることを含め、あるテキストにおける用例を拾いながら、そのテクストの世界をこれまで以上にはつきりとした形で見出せるようになるのではないかと考えられる。

これは、話型などの諸分類に基づく構造上の類縁関係、あるいは特定の伝説の伝播、伝承の様態とその変容を明らかにする現在の研究とは、一線を画するかもしれない。コンピュータを

用いた昔話研究としてはFDLという大きな成果がある。しかし、表記や方言の問題を乗り越えた構造分析のためのツール(FDL)と、FDLで拾いきれない豊かな言語表現の問題を扱う電子テキストは、決して対立するものではなく、むしろ互いの持たない点を補い合うものと言えるのではなかろうか。電子テキストは、テクストの精緻な読みを補強する、重要な言語表現分析のツールとなるはずである。

昔話のWEB上で公開は日々進められている。その公開された大量のテキストデータの本文を有効に用いて、「語り」の実態に即した状態のまま、昔話を分析するという研究姿勢があつてもよいはずである。そういうた「語り」そのものの言語表現の分析にコンピュータがどのように寄与しうるか、という新たな研究方法について考へるきっかけになつてゆきたい。

## 注

- (1) 数多くあるサイトから、二つの重要なものを挙げる」といする。

村崎恭子「浅井タケ昔話全集Ⅰ・Ⅱ」

[http://www3.aat.tufs.ac.jp/~minine/kiki\\_gen/murasaki](http://www3.aat.tufs.ac.jp/~minine/kiki_gen/murasaki)  
遠藤庄司「沖縄の民謡」(<http://www.okiu.ac.jp/minwa/index.html>)

(2) 佐藤皇太郎「昔話記述言語(FDL)の紹介」(『昔話のイメージ』、昔ばなし研究所、2000)

(3) 石井正「監修「遠野物語辞典 動植物編」(東京学芸大学

古典文学第四研究室、2001)、石井正己監修「遠野物語辞典 神仏編」(東京学芸大学古典文学第四研究室、2001)、

石井正己監修「遠野物語辞典 怪異編」(東京学芸大学古典文学第四研究室、2002)、

小澤俊夫氏「昔ばなし研究所 開設の趣旨」(2001)による。

(5) 柳田国男『柳田国男全集』2(筑摩書房、1997)

(6) 柳田国男『遠野物語 増補版』(郷土研究社、1935)

(7) 「狐」では出てこないが、「後記」と「遠野郷関係略図」にある地名が含まれる場合は、「索引」の後に並ぶ」といなる。

(8) 以後、「遠野物語」の場合は「〇〇話」、「遠野物語拾遺」の場合は「拾遺〇〇話」とする。

(9) 真鍋知代「狐の話」(野村純一他編『遠野物語小辞典』、

さようせい、一九九一)

(10) 近藤正尚「狐」(野村純一他編『遠野物語小辞典』、

さようせい、一九九一)

(11) 青木俊明「狐」(『遠野物語辞典 動植物編』、二〇〇一)

(12) 『遠野物語 増補版』と、角川文庫版では「索引」の該当話に異なる部分があり、こゝであげたのは『増補版』の数である。角川文庫版では、二〇話、拾遺一〇五話、拾遺一二四話、拾遺一八〇話、拾遺一八一話、拾遺一八二話の六つの話になる。「蛇」に関する他の「索引」項目に

については、いずれも同じである。

(13) テキストデータでは角川文庫版と同様に、五〇音順に改めた。

(14) 近藤正尚「蛇」(『遠野物語辞典 動植物編』、二〇〇一)

(15) 多比羅「蛇」(『遠野物語辞典 動植物編』、二〇〇一)

(16) 石井正己「馬」(『遠野物語辞典 動植物編』、二〇〇一)

(17) 石井正己「馬」(『遠野物語辞典 動植物編』、二〇〇一)

(たひら・たく／八王子高等学校教諭)